

博士論文（要約）

テレビ都市・東京  
——戦後首都の遠視法

松山 秀明

東京は、つねに混沌として語られる都市である。東京は建て替え、継ぎ足しが繰り返され、無秩序に発展してきた都市のカオスである。東京には明確な中心点がなく、さまざまな副都心が点在し、その像をはっきりと見定めることはきわめて難しい。東京はパリのように凱旋門から放射状に延びる街路をもつ秩序だった都市とは異なり、掴みどころのない茫漠とした都市である。これまで東京は、1950年代～70年代の「戦後首都学」や1980年代～2010年代の「東京空間論」の枠組みのなかで論じられてきた。

1950年代～70年代に勃興した戦後首都学で目的とされていたのは、東京を「近代都市」と捉え、その発展史を描くことであった。この立場では主に明治期以降の東京、より正確に言えば、1888年の東京市区改正条例の公布から東京の近代化が始まったとし、関東大震災、東京大空襲、高度経済成長など、近代都市へと発展していく東京の歩みを編年的に記述していく。この立場の共通認識としてあったのは、東京が敗戦後の廃墟から立ち直ったという発展史観であり、それに至った都市の「構造」や「システム」を把握することであった。つまり、戦後首都学とは、近代都市・東京の都市としてのシステムを明らかにし、遡及して、東京の発展史を記述しようとする試みであった。

一方、1980年代～2010年代に勃興した東京空間論で目的とされていたのは、東京を「現代都市」と捉え、その空間の分化を把握することであった。東京空間論は、1980年代の東京論ブームの呼び水となり、それまでの都市計画学や経済学だけでなく、社会学や文学、歴史学、記号論といった学際的な研究領域として展開した。ここで東京空間論の前提としてあったのは、東京を現代都市と捉えることで、東京の空間を記号や意味から読み解こうとすることであった。ゆえに、東京空間論とは、江戸との空間の連続性や、東京の微細な空間に注目することで、そこに生きる人びとや物件、残された風景を丹念に記述しようとする試みであった。

本論文では、戦後首都学、東京空間論に続く第三の視点として、「メディア」から戦後東京を読み解く試みである。東京とは時間や空間として把握されると同時に、メディアにおいて消費され、意味づけられる都市であり続けてきたことは言うまでもない。たとえ東京に行ったことがなくても、日々さまざまなメディアが東京について取り上げ、人びとの頭のなかには「東京（らしきもの）」が創りだされている。より単純化していえば、東京はさまざまなメディアによって生産され、流通され、消費される、イメージとしての都市でもある。本論文では、東京をメディアからまなざされることによって存在する都市であるとして、「メディア的都市」とみなした。

もちろん、1980年代の東京論ブームにおいて、主に「文学」というメディアから東京を論じようとした「テキスト論的都市論」の動きはこれまでであった。しかし、これらの「東京とメディア」に関する研究は、書き手の関心に応じ、その解釈も書き手に依存するという研究の限界があった。それは特定のメディアテキストに固執し、興味本位にさまざまなテキストの断片を使って東京を解説することに終始してしまっていた。とりわけ文学研究が不幸だったのは、文学というメディアは当初から透明な媒体として、書物のなかの都市と一緒に歩くことしかできなかったことである。より大胆に言えば、東京を読み解くためのメディアとして、文学は適切ではなかった。

東京を語るうえで、文学以上にもっと適したメディアがあるのではないか。それがテレビであ

る、というのが本論文の最大の主張であり、目的である。20世紀は放送の世紀であったことは言うまでもない。とりわけ戦後東京史をテレビ史とともに読み解くことは、新しい「メディア史的東京論」となり得る。戦後東京の枠組みを規定した最大のメディアは、文学でも、写真でも、映画でもなく、テレビであるのではないか。戦後東京の成長は、驚くほどにテレビの成長とリンクしている。ゆえに本論文では、とくに戦後東京を「テレビ都市」と名付けた。

戦後東京が「テレビ都市」と呼ぶにふさわしい理由は三点挙げられる。第一に、1953年に誕生した日本のテレビは、東京（キー局）を発信の拠点とした「ネットワーク」で編制されていた。全国放送としての理念をもつNHKであれ、地域放送としての理念をもつ民間放送であれ、各都道府県に放送局をもち、それらを組織化することで日本のテレビ・ネットワークは成り立っている。このようなネットワークによる系列化が「東京（＝キー局）」と「非東京（＝地方局）」の関係を鮮明な形で浮き彫りにした。第二に、戦後、テレビというメディアは全世界を包み、家庭のなかに「見知らぬ世界」を供給し続けてきた。家庭に居ながらにして、人びとは未知の世界を経験できるようになり、とりわけ戦後日本社会において「東京」を家庭のなかに持ちこんだのは、ほかならぬテレビであった。第三に、テレビは番組という生産物を生みだし、「東京」の姿を全国に映し続けてきた。ニュース、ドラマ、ドキュメンタリー、CM、バラエティなどさまざまなジャンルの番組が日々、東京の姿を映し出している。テレビの電波的特性によって、人びとはたとえ東京にいなくても、東京の情報を瞬時に手に入れることができるようになった。ゆえに以上をまとめれば、テレビでは、東京を中心として構築されたネットワークが、電波という広範性をもって、東京発の番組を全国にあまねく供給していったことになる。これを言い換えれば、テレビによって、東京の東京による東京のための都市・東京のイメージが、全国の戦後「東京」観を下支えしていったのである。

本論文では、以上の問題関心に基づいて、テレビが都市に対して作る3つの視点（三角形）から戦後東京史を記述した。すなわち、（1）テレビによる東京、（2）東京のなかのテレビ、（3）テレビのなかの東京、である。まず、（1）テレビによって東京がどう拡散し、認識されてきたのかを問うメディア論的な次元（＝テレビによる東京）。ここでは主にテレビの技術論と、それに伴う視聴者の認識論を問うことになる。次に、（2）東京の都市空間のなかで、産業としてのテレビがどのように配置され、東京を意味づけてきたのかを問う地政学的な次元（＝東京のなかのテレビ）。ここでは主に、テレビの産業としての側面を問うことになる。最後に、（3）テレビのなかで東京がどのように描かれてきたのか、番組内容を問う次元（＝テレビのなかの東京）。ここでは主にテレビの番組論を問うことになる。これらテレビが東京に対して作る三角形から、戦後東京史を記述していくことを本論文の視座とした。

その結果、本論文では戦後東京史における4つの時代区分が明らかになった。この時代区分は、これまでの戦後首都学や東京空間論とも異なる、テレビ史から初めて見えてきた新しい戦後東京史の時代区分である。本論文の構成は、この4つの時代区分から成り立っており、【第一章】〈東京〉の措定、【第二章】〈東京〉の喪失、【第三章】〈東京〉の自作自演、【第四章】〈東京〉の残影、である（本論文ではテレビによって作られる東京を〈東京〉と呼んでいる）。

第一章ではテレビが始まった1950年代半ばから、普及していく1960年代までを扱っている。とりわけ1950年代～60年代前半は、テレビによって東京が措定され、前景化していった時代であった。テレビが作る「同時性」空間は東京を日本の中心地へと押し上げ、さらにオリンピックを起爆剤にして、全国に東京で起きるイベントが遍在した時代である。また同時期、東京の都市空間のなかには例えば東京タワーなどの放送装置が設置され、それ自体が東京のイメージに重要な役割を果たしていく。さらに、テレビ番組のなかでも近代都市・東京像が盛んに描かれ、テレビは「東京はここだ」「東京とはこうだ」と〈東京〉を措定し続けた。

第二章では、テレビが大衆化した1970年代から1980年代前半までを扱っている。1960年代後半になると、それまであったテレビによる「同時性」空間が徐々に変質し、それに伴って1970年代以降、〈東京〉が変容した。「東京とはここだ」という措定そのものが難しくなり、1970年代から80年代前半にかけては〈東京〉が喪失した時代である。事実、1960年代後半以降、テレビ産業では多くの地方局が開局し、東京以外で放送装置が建設されることで「地方の時代」と連動した紀行ドキュメンタリーが数多く制作された。ただし、ここでの地方とは、あくまで〈東京〉に支えられることで規定される存在であった。1970年代～80年代前半は、〈東京〉が不在となつて喪失するがゆえに、〈東京〉が規定された時代であった。

第三章では、東京の情報化・国際化が急速に進む1980年代後半から1990年代までを扱っている。1980年代後半より、テレビでは「虚構の映像共同体」(吉本隆明)が形成されつつあった。その結果、当時の臨海副都心計画とも結びつき、フジテレビが〈お台場〉に新社屋を建設して周辺をおしゃれなデートスポットへと変えていく。このとき、テレビは見るものだけでなく、見に行くものへと変容した。さらに、フジテレビではトレンドドラマのなかでも虚構的に〈東京〉を描いて視聴者を物語に巻き込むなど、1990年代はテレビが産業としても、番組としても、自作自演的に〈東京〉を生みだしていった時代であった。

第四章では、テレビの虚構空間が成り立ちづらくなった2000年代から2010年代までを扱っている。2000年代半ばに起きたフジテレビの買収騒動は、〈東京〉の自作自演の終わりを予感させ、2000年代以降はテレビだけでは東京を論じきれなくなる時代へと突入した。そのなかでも、2012年の東京スカイツリーの建設や2020年東京オリンピック招致など、1950年代から60年代前半における〈東京〉の措定と同様の動きをテレビ都市は見せていくことになる。一方で、テレビ番組のなかでは、東京の「格差」が盛んに取り上げられ、テレビは〈東京〉の残影を求めていくことになった。しかし、2010年代は戦後東京史とテレビ史が徐々に乖離を始め、テレビの作る〈東京〉の枠組みが成り立ちづらい時代となった。

こうして、【第一章】1950年代～60年代の〈東京〉の措定、【第二章】1970年代～80年代前半の〈東京〉の喪失、【第三章】1980年代後半～90年代の〈東京〉の自作自演、【第四章】2000年代～10年代の〈東京〉の残影、という変遷はテレビによって〈東京〉が作り上げられてきた歴史であった。各時代において構成される〈東京〉の三角形——(1)テレビによる東京、(2)東京のなかのテレビ、(3)テレビのなかの東京——は、テレビ都市・東京の切断面を浮き彫りにし、4つの時代区分によって戦後の〈東京〉が展開してきたことを明らかにした。テレビ史か

ら読み解くことによって、戦後東京史の新たな断層が見えたのである。

以上の4つの「テレビ都市」の変化を辿って気付くことは、テレビは「戦後東京」の見せ方を変化させつつ、「いかにして東京を中央化するか」という思想で作動してきたことであった。テレビは外部に広がる東京という世界を示すために、その中心性を強調するか、周縁を強調するかのいずれかの方法で、東京の「中央」を誇示しようとしてきた。

例えば1950年代～60年代前半のテレビ都市は、メディア・イベントによって東京が「中央」の舞台であることが強調されていた。それが1970年代に入ると〈地方〉を発見し、電波的な郷里という「周縁」が開拓されることで東京は地方によって輪郭が与えられた。こうして東京を遠視してきたテレビは1990年代に入ると、一転して非遠視的（近視的）となるが、たとえ遠くで起きている出来事ではなくても、テレビは自らが作りだした「虚構の映像共同体」を視聴者に見せることで、その虚構空間を用いて視聴者の置かれた環境と比較させた。ここでもテレビのもつ遠視という基本的な原理は崩れていない。2000年代に入ってもテレビは格差という「(見えない)周縁」を発見し、つねに視聴者の環境を相対化させていく。こうして見てみると、テレビ都市はそのまなざしを「周縁」・「中心」へと交互に変えながら、戦後日本社会の空間秩序を創りだし、一貫して〈東京〉を生み出し続けてきたことが分かる。ここに戦後一貫した、テレビによる東京中心の発話構造を確認することができるのである。

テレビとはつねに日本の中央＝〈東京〉を規定し続けたメディアであった。中央と周縁という空間秩序を巧みに操作することによって、戦後日本において東京を中央へと押し上げ、中心点を人びとに知らせ続け、そして、視聴者が住む環境と東京を比較させ続けてきた。テレビというメディアは、戦後、単に番組を作っただけでなく、日本における中央と周縁という空間秩序を生成し、〈東京〉を作り上げていったのであり、ここに「戦後首都の遠視法」がある。